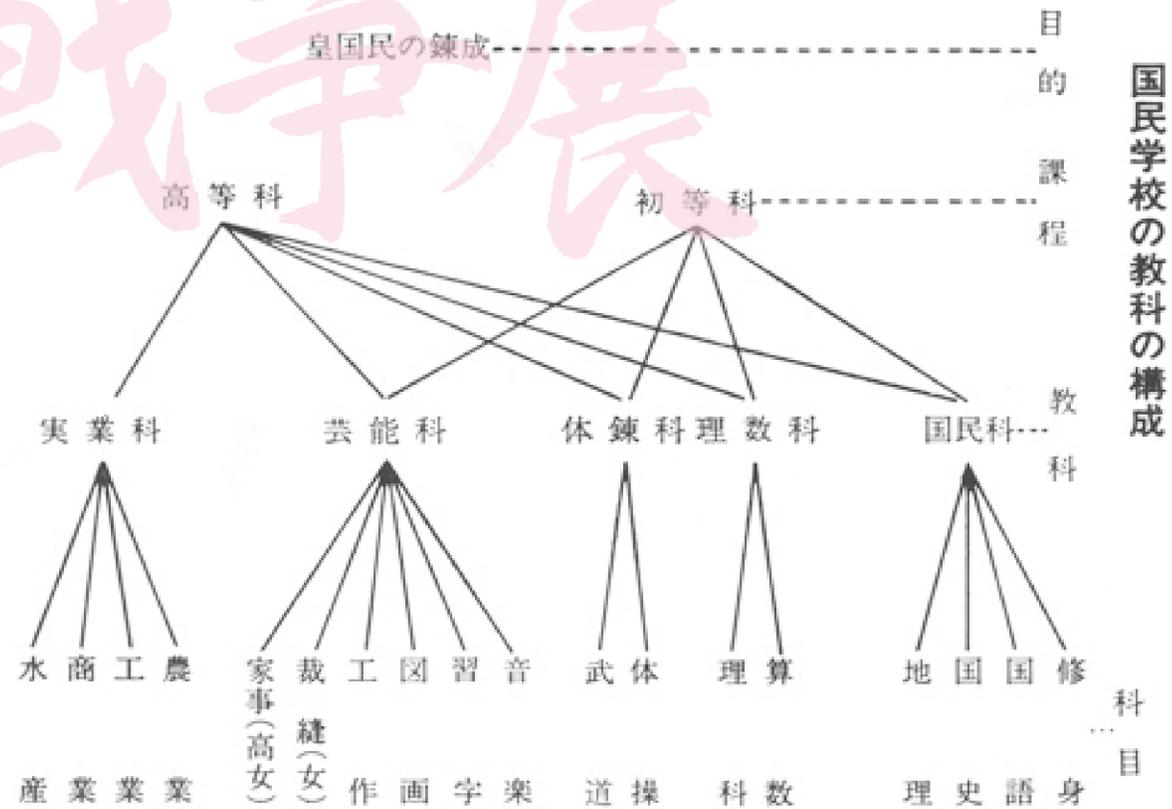


学校教育における体育—兵式体操から教練へ

戦争展



国民学校の教科の構成

すべての教科は、「国民錬成の一途に帰せしめ」られたのである。

(出典：埼玉大学教育学部附属小学校開校百年教育小史)

昭和13年5年丙組時間割

土	金	木	水	火	月			
史藤	歴齋	民美	公佐	語宇	英宮	ノ二	漢田	1
角橋	三高	何谷	幾大	角橋	三高	数谷	代大	2
語(副)日	英南	身長	修校	語見	国里	文原	漢田	3
科井	理亀	作久	英和大	練野	教吉	語(副)日	英南	4
	道井	武今	語森	国杉	画保	図久	語大	5
	科田	理横	業田	作丸	操山	体村	練西	6
	学田	化横	訳宮	英ノ二				外 課

(出典：熊谷高校八十周年誌)

(大正2年) 1月28日、文部省は、学校体操教授要目を制定した。これによって当時生徒たちに課せられていた「兵式体操」は、以後「教練」と改められる(以下略)

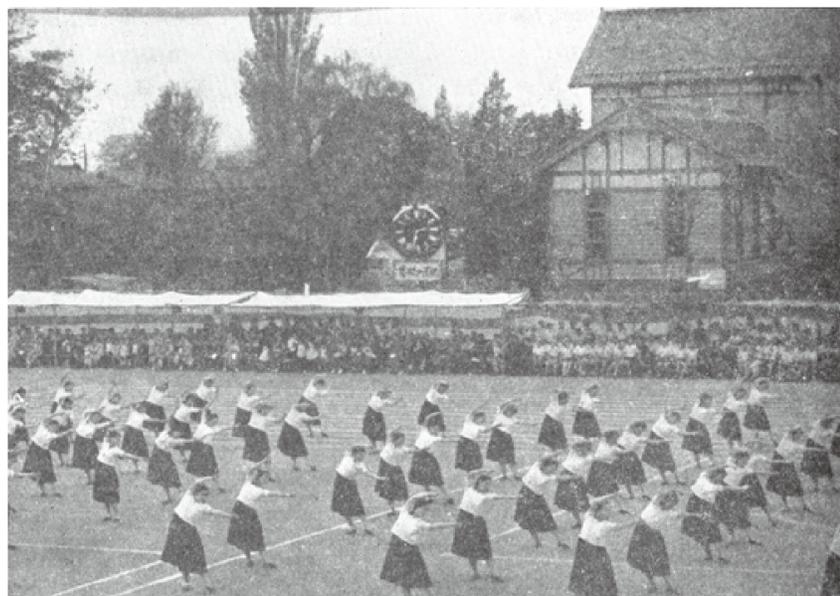
(出典：熊谷高校八十周年誌)

大正14年

4月12日「陸軍現役将校配属令」公布さる。軍事教練が一層強化されることになり、テキストに歩兵操典が使用されるようになる。(出典：熊谷高校百周年誌)

昭和13年といえば、「満州事変」が「支那事変」に発展して2年目、太平洋戦争の前夜である。毎日ゲートルを巻いて登校し、教練、作業に重点がおかれた日課が続いた(以下略)

(出典：熊谷高校八十周年誌)



漢口攻略記念運動会 中央の時計の下に「祝漢口攻略」とある

(昭和13年10月29日)(出典：熊谷女子高等学校創立70周年記念『鈴懸とともに』)



運動会・自校体操(昭和17年)

(出典：浦和第一女子高等学校百年誌『ゆうかりとともに』)

戦時中の運動会
戦時下での昭和十七年十月二十五日に行われた運動会は「体育錬成会」と称し、内容も「鍛錬」を目的としたものとなった。堂々たる分列行進、正義の道を音高らかに非常時女学生の意気亦かくの如しと一歩々踏みしめる力強さ。(中略) あっかくて意義深き体育錬成大会の幕は閉ざされた。大東亜戦下真に烈々たる熟と技との敢闘譜であった。聖戦目的達成の為、彼等は勝つて益々兜の緒を締め今後の錬成に愈々励まんことを堅く「相共に誓ふものである。」

(出典：浦和第一女子高等学校百年誌『ゆうかりとともに』)

軍事教練

軍事教練

軍事教練（学校教練、略して教練とも言った）は、明治十九年の学校令制定の際、兵式体操として多少の軍事的教育が行われることになってはいたが、教練としての実体が整えられたのは、大正十四年（1925年）の「陸軍現役将校配属令」の公布後と言われている。これは第一次世界大戦後の国際条約にもとづく軍備縮小（大正十四年、日本では陸軍の四個師団を削減した）を背景に先の「配属令」を公布し、全国の中学校以上の学校に削減された四個師団の将校を、「配属」して、学生・生徒に軍事教育を行ったのである。

この政策は、第一に職業軍人の失業救済となり、第二に軍縮は世界の風潮におもねる方便であったから、軍人を各学校に配属しておけば、いつでもまた第一線将校として活用できる。第三に青少年に軍事の実際と軍国思想を教育することができる。ということである。当時「一石二鳥どころか、「一石三鳥」の妙案と言われたものであった。

（出典：秩父農工百年誌）

（出典：熊谷高校八十周年誌）



熊中生徒中隊編成訓練（昭和9年）



行軍のため熊谷駅前集合（昭和9年）

（出典：秩父高校百年誌）



軍事教練



熊高女でも軍事教練 昭和18年頃

（出典：熊谷女子高等学校創立70周年記念『鈴懸とともに』）



「射撃教練」戦時中の教練

（出典：秩父農工百年誌）



軍事教練（昭和10年）

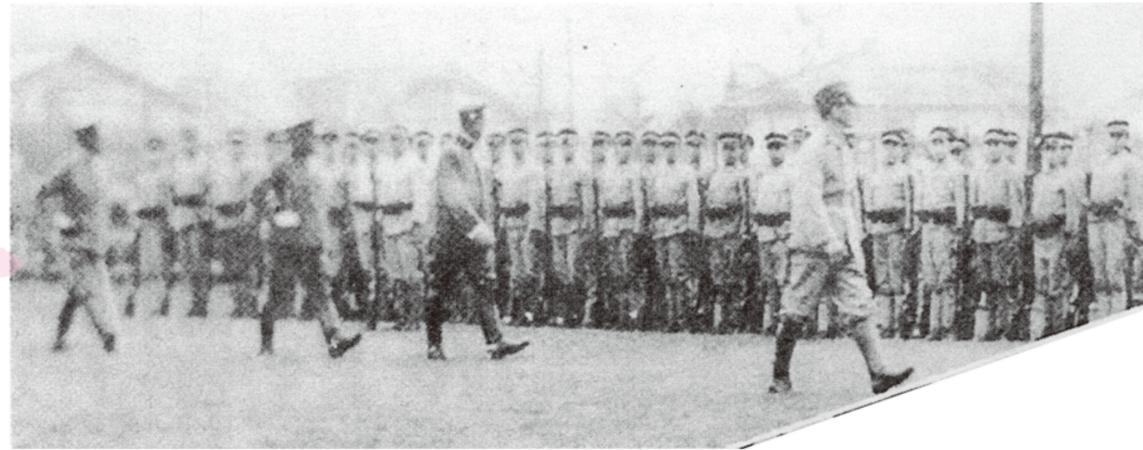
（出典：春日部高等学校創立八十周年誌『やぎさき』）

平和のため 軍事教練における査閲と天皇御親閲

軍事教練に係わるものとしては、この外県下中等学校の総合演習への参加等いろいろあるが、最後に教練の総仕上げとしての査閲について一言ふれておこう。先きの「配属令」の第四条にも、陸軍大臣は将校を配属した学校における教練実施の状況を査閲させることができる旨の規定があるが、これは言わば学校の教練の一年間の成果をみる機会であり、配属将校にとってまた学校にとって大変なものであった。

査閲官は聯隊から、中佐か大佐級の軍人が派遣されてくる。査閲の日が決まると、その数日前より準備や予行が行われた。予行演習で、閲兵の際不動の姿勢をとっているのに、目玉が動いたということで革の長靴で腰を蹴り上げられた友人がいたことを思い出す。当時は、体罰は通用しなかったわけである。

(出典：秩父農工 80 年誌)



査閲

(出典：秩父農工百年誌)



査閲行進風景

(出典：熊谷高校八十周年誌)

(昭和 16 年 11 月 29 日) 5 年生は二里の行軍を終えてから河原松山で査閲を受けた。全員、養蚕に使う網に枯れ草をはさんで偽装した。二組の「仮兵刺突」から始まった。

次に 3 組の「擲弾筒並びに軽機関銃の操作」、最後に 1 組 4 組合同の「小隊の戦闘教練」を行い、二組は仮設敵になった。終って松林前に終結し学科試問があつてから査閲官の講評があつた。結局、今年も「優良」という成績だったので、皆やけくそになって、軍歌を歌いながら帰校した。

(出典：熊谷高校百周年誌)



防護団査閲 (昭和 18 年)

小川高校五十周年誌『教育の証言』

旗手西山安次郎君急逝

昭和九年十一月十七日、高崎乗付練兵場における天皇御親閲の行進の中に、深紅の粕壁中学校校旗は翻っていた。旗手は西山安次郎君。その夜の設営幕舎において、先頭の栄光を担った西山君は突然発熱。医師より急性肺炎の宣告を受けて高崎病院に入院。翌日急逝。その栄光と死の迅速さに、全校をあげて強い衝撃を受けた。

(中略)

西山安次郎君の急死は、ようやく苛酷の度を加えてきた、軍事教練の犠牲者の一人として挙げられるが、その淵源は、大正十四年陸軍現役将校学校配属令と教練教授要目の制定による、軍事訓練強化にさかのぼる。配属将校監督のもと、その当初から完全武装の上、四軒以上駆け足をさせられ、病人も出ている。昼食は教室で食べさせられず、寒風吹きすさぶ校庭の隅で、砂塵を避けながら、ふるしきをかぶって弁当を開くこともしばしばであったという。

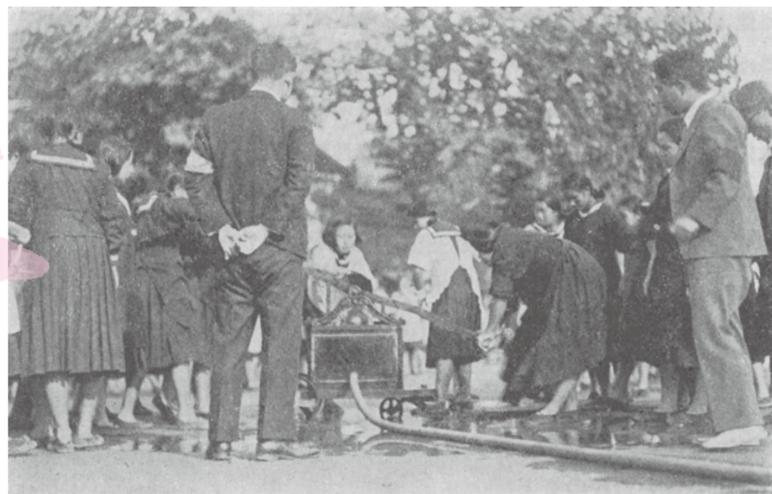
(出典：春日部高等学校創立八十周年誌『やぎさき』)

平和のための埼玉 防空訓練・演習そして空襲

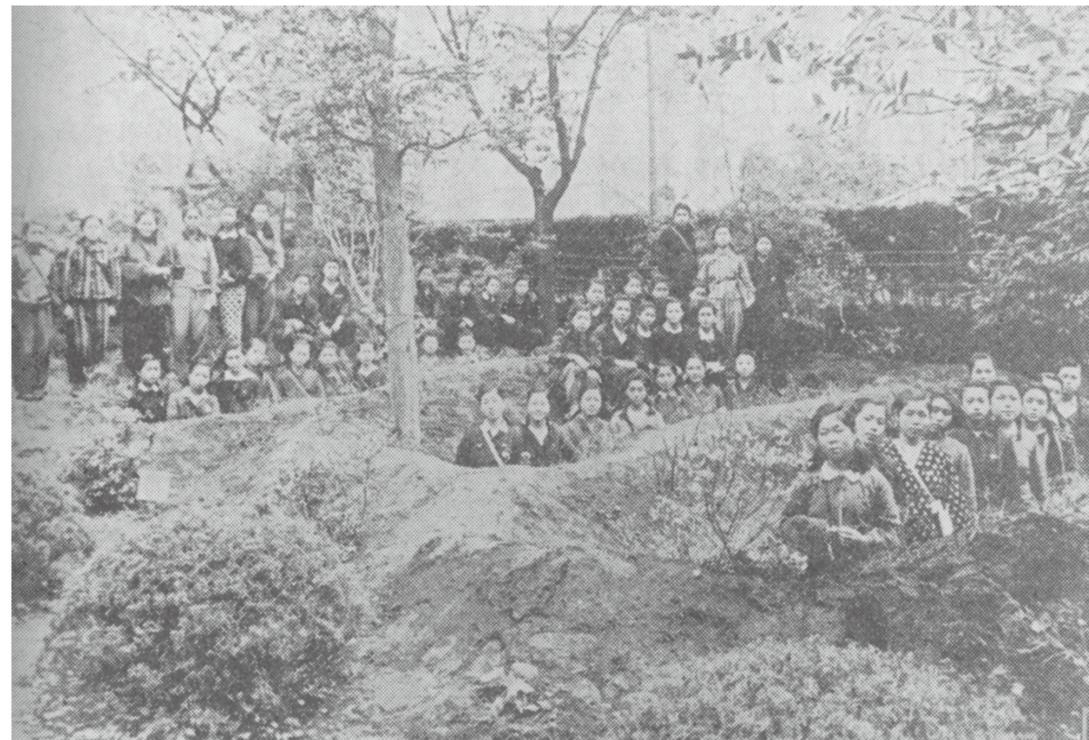
戦争展



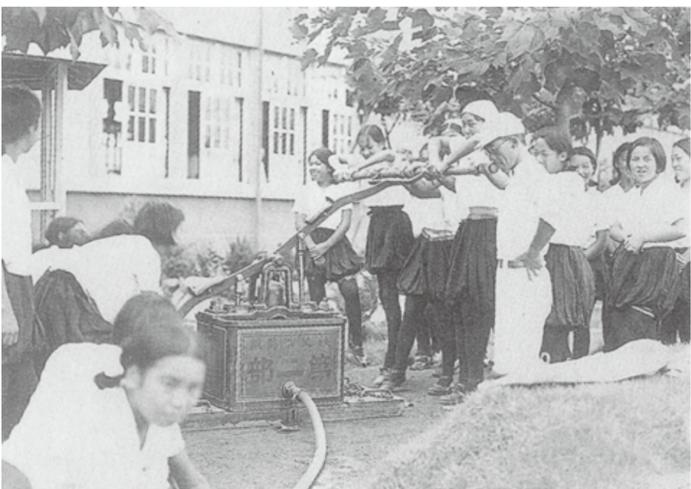
防空訓練毒ガス救護班（昭和13年）
（出典：熊谷高校八十周年誌）



消火訓練（昭和17年）
（出典：熊谷女子高等学校創立70周年記念『鈴懸とともに』）



昭和19年5月、もんぺ姿で校内に完成した防空壕に集合
（出典：浦和西高等学校創立50周年記念誌）



防空演習（昭和15年）
（出典：秩父高校百年誌）



空襲に備えての防火訓練風景
（出典：熊谷高校八十周年誌）



防空訓練（昭和16年ごろ）
（出典：浦和第一女子高等学校百年誌『ゆうかりとともに』）

（昭和13年）九月十五日には、県民百五十万人総動員の防空訓練が行われた。それに先立ち数日前から演習が各地で行われ、「時局教育に意を注ぐ県立浦和高女では正午非常呼集を行ひ防毒マスク、手拭の鉢巻も甲斐甲斐しく校庭の一隅から吹きつける煙幕の中を重要書類持出演習を行ひ銃後陣強化を目指して猛訓練を行った」との記事が、九月十三日付「東京日日新聞」に掲載された。

（出典：浦和第一女子高等学校百年誌『ゆうかりとともに』）

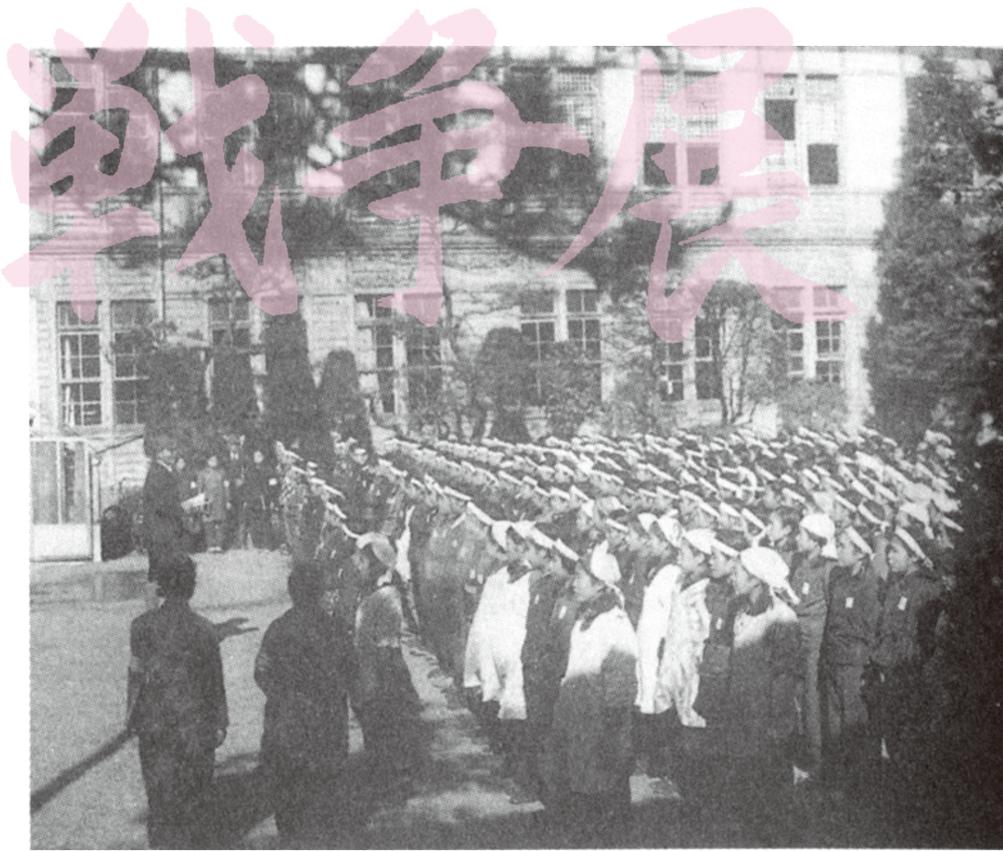
昭和二十年の三月十日、東京大空襲の夜だったと思います。校舎を守るため、夜の夜中でも詰めかけて居りました。朝から警戒警報が出て、子供達を家に帰し、静かな校舎の中で、水、砂等の点検をして万全の備えに、時を過ごしました。夜になって空襲になり、校庭に一つ、廻りの家にポツンポツンとはなれて焼夷弾が落とされ、火災を起こしていましたが、校舎には何ら被害はなかったのです。

（中略）

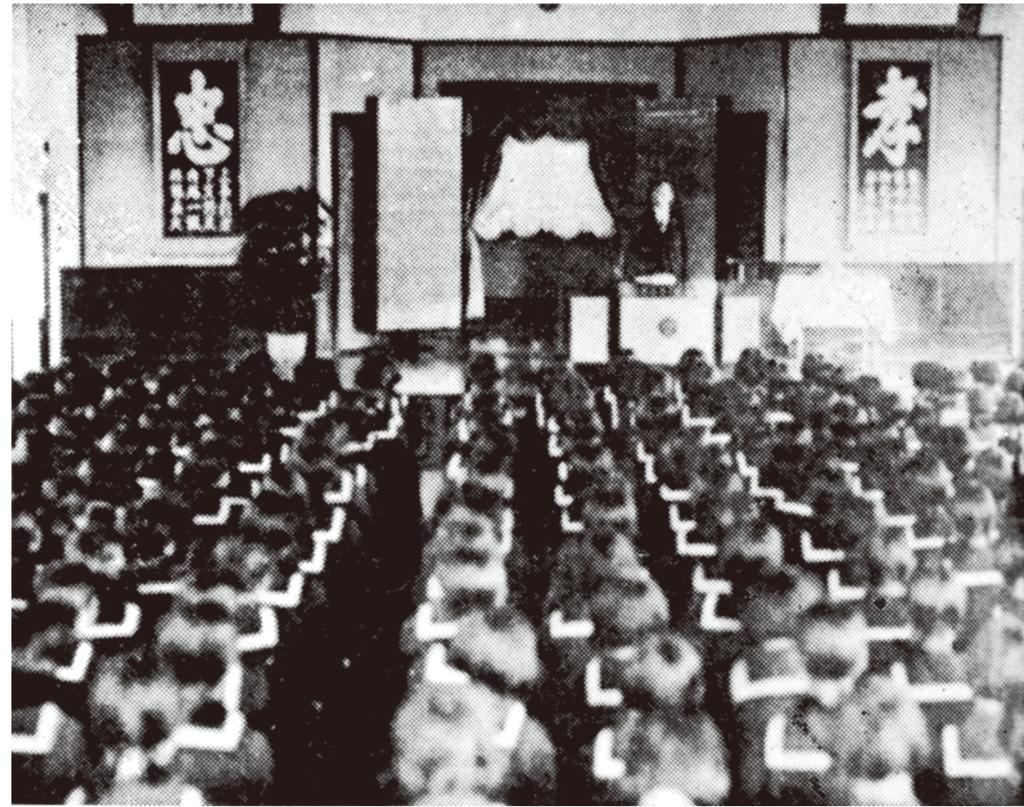
悪夢のような夜が明け、子供達全員校庭に集め、異常がないか調べたのです。私のクラスの女の子が一人欠席でした。子供達の話によると、焼死したと言うのです。早速家に行ってみると、この子の家だけに直撃を受け焼け落ちていました。どれが誰とも見分けがつけられない程焼けぶくれて、三つの死体ごろがっていました。大きいのがきっとお母さんでしょう。その側に小さいのが二つ、寄りそってでもいるように並んでいました。余りのむごたらしさ凄まじさに、声すら出ませんでした。

（出典：常盤小学校開校50周年記念『ときわ』）

平和のための埼玉の 儀式を通じた軍事教育



中庭での朝礼（一日中鉢巻をしていた／昭和 19 年ごろ）
（出典：浦和第一女子高等学校百年誌『ゆうかりとともに』）



祝祭日儀式—正面が御真影（昭和 13 年）
（写真・文 出典：小川高校五十周年誌『教育の証言』）

儀式教育

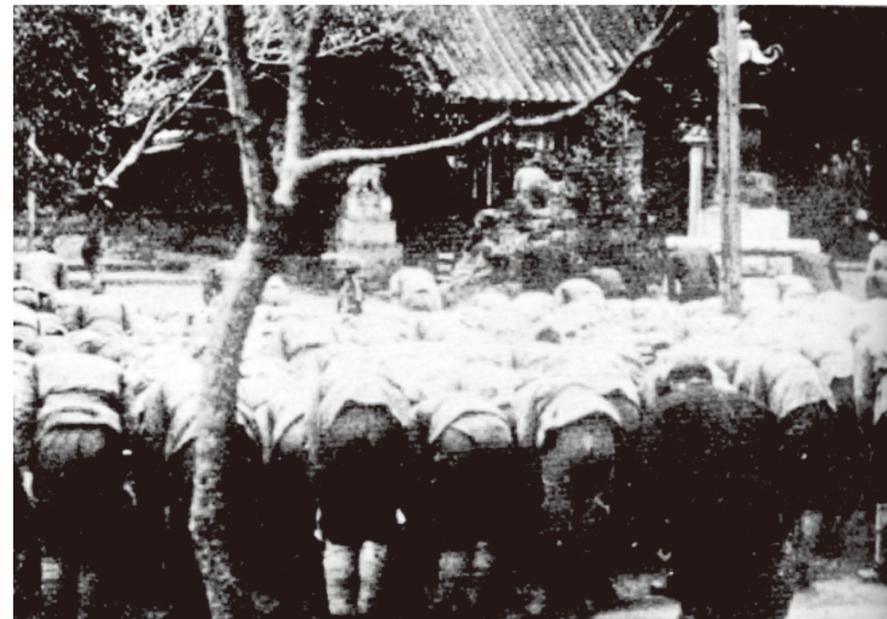
日本の教育のもつ一つの特徴に多くの儀式のあったことがあげられる。しかもそれらが国家的祝祭日を中心に天皇制とふかく結びついていた。儀式の主なものあげれば、四方拝々賀式（一月一日）、紀元節（二月十一日）、地久節（三月六日）、天長節（四月二十九日）、戊申詔書捧読式（十月十三日）、教育勅語捧読式（十月三十日）、明治節（十一月三日）、国民精神作興に関する詔書捧読式（十一月十日）それに卒業式である。これらの儀式には御真影の礼拝が行われた。儀式の厳粛主義は今日でもなお続いているが、それはかつての御真影の前で行われた時代の名残りともみられないでもない。

玄関の太鼓が鳴ると8時 20 分。全校生徒朝礼場に集合。全校週番（5年の級長と副級長、この人たちは多く陸軍士官学校や海軍兵学校へ進学した。）の号令で朝礼が始まる。表朝礼場の西に神社がある。神明宮という。全員で拝礼する。金子校長は神官の家の出身で敬神の念が厚かった。拝礼のあと全校生徒の唱和があった。軍人勅諭や五ヶ条の御誓文や吉田松陰のことばなどだった。そのあと校長の訓話があった。

（出典：熊谷高校百周年誌）

昭和 17 年に県の学務部長名で『大詔奉戴日設定二関スル件』が出され、毎月8日に詔書奉読がなされるようになった。「大東亜戦争戦争完遂ノ為、必勝ノ国民士気昂揚ニ重点ヲ置キ健全明朗ナル積極面ヲ發揮スルコト」になったのである。

（出典：熊谷高校八十周年誌）



大詔奉戴日（八幡神社参拝）
（出典：春日部高等学校創立八十周年誌『やぎさき』）



紀元二千六百年記念植樹（昭和 15 年 11 月 10 日）
（出典：春日部高等学校創立八十周年誌『やぎさき』）

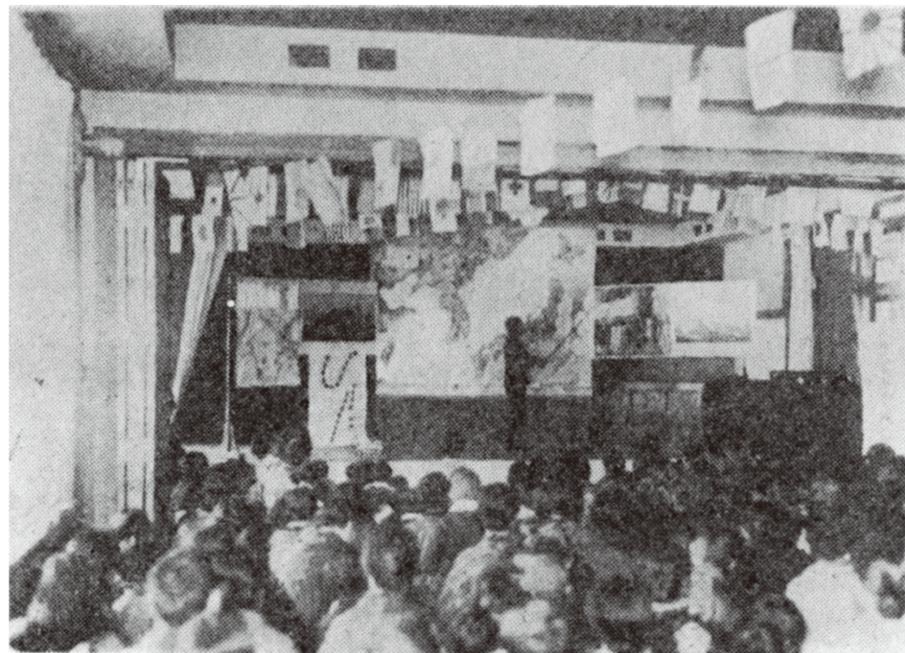
平和のための埼玉の 戦争展

平和のための埼玉の 戦時色強まる学校行事

戦時



昭和 14 年除州大捷を祝う生徒たち



学芸会”日本海海戦”6年

昭和十四年に政府は国民精神総動員強化方を決定した。すでに十二年には浦和第一高等女学校防護団を設置し、同年浦和市から「応召軍人の見送方依頼の件」の文書が出されている。見送りのみでなく、遺骨の出迎え、大勝祝賀にも生徒が動員されている。

(出典：浦和西高創立五十周年記念誌)

『愛国行進曲』

1 番

見よ東海の空明けて
 旭日(きよくじつ)高く輝けば
 天地の正気滌(せいきはつらつ)と
 希望は踊る大八洲(おおやしま)
 おお晴朗(はる)の朝雲に
 簷(そび)ゆる富士の姿こそ
 金甌(きんおう)無欠揺るぎなき
 わが日本の誇りなれ

2 番

起て一系の大君(おおきみ)を
 光と永久に頂きて
 臣民我等皆共に
 御稜威(みいつ)に副(そ)はむ大使命
 往け八紘(はっこう)を宇(いえ)となし
 四海の人を導きて
 正しき平和打ち立てむ
 理想は花と咲き薫(かお)る

3 番

今幾度か我が上に
 試練の嵐(あらし)とけるとも
 断乎(たんと)と守れその正義
 進まむ道は一つのみ
 嗚呼悠遠(ああゆうえん)の神代より
 轟く歩調受け継ぎて
 大行進の行く彼方
 皇国(こうこく)常に栄えあれ

午後一時開会、宮城遥拝、在満支の皇軍将士への感謝の黙禱、国歌斉唱、校長の開会の辞、そして、「傷痕の勇士」を斉唱し、生徒の演奏に移った。(中略)最後に愛国行進曲を歌い、幕が閉じられた。

(出典：浦和第一女子高等学校百年誌『ゆっかりととも』)



音楽会入口風景(昭和 14 年 2 月)

■昭和十三年度(第十、十一号より)
 少年赤十字団だより(昭和十一年四月二十八日発団)
 (中略)

実施している事業

- ・ 応召軍人の見送り・戦没者遺骨の出迎え及市葬参列
- ・ 市出身の応召軍人へ慰問文発送
- ・ 日支事変戦死者遺族の慰問(など以下 略)

第七回児童唱歌コンクールへ初出場 音楽週間理事会主催
 課題曲目「空の荒鷲」
 自由選曲 男「軍馬隼号」女「軍港の朝」
 十月十六日 第一回府県別コンクール 女子師範学校行動

▲(出典：常盤小学校開校50周年記念『ときわ』)

平和のための埼玉の教育現場にも戦争の影が



出征兵士を送る（昭和 11 年）

（出典：小川高校五十周年誌『教育の証言』）



応召兵の見送り 昭和 12 年 9 月～

（出典：常盤小学校開校 50 周年記念『ときわ』）



昭和 17 年 このようなポスターが多く見られるようになった。

（出典：宮寺小学校開校百周年記念誌）



校長以下、職員も生徒も「聖戦」を疑うものはいなかった。「をがは」第十号はこの日中戦争に関する生徒の感想、あるいは出征兵士に送った慰問文の特集を行っている。それらはいずれも異口同音に皇軍の苦勞に感謝し、銃後国民の責任と決意をのべ、聖戦の完遂と東洋永遠の平和をねがうものであった。日本帝国主義の非道な侵略について知ることは全くなかったのである。職員、生徒は出征兵士のあるたびに校門前に整列してこれを送った。

（出典：小川高校五十周年誌『教育の証言』）

◀昭和 19 年 西勝昭治君（前列中央タスキをかけた少年）

満蒙開拓義勇軍入所記念

このような少年が、国の政策によって多数満州に送られた。

（出典：宮寺小学校開校百周年記念誌）

平和のための埼玉の 学校歌も戦争の道具に

学校歌にも文部省の認可が必要だった

文部省は明治 27 年に文部省訓令第 7 号を発し、唱歌科の教材たる唱歌ばかりでなく、初等学校内で使用される全ての唱歌（学校内唱歌）が、「本大臣の認可を受けたるものの外は採用せしむべからず」と、法令上文部省の完全な掌握下に置かれた。

その後、昭和 14 年には、文部省令第 49 号「師範学校中学校高等女学校並青年学校ニ於イテ唱歌用ニ供スル歌詞楽曲ニ関スル件」により、その範囲が拡大され学校歌の歌詞も戦時色濃くなる。



(出典：埼玉大学教育学部付属小学校開校百年教育小史)

歌は世につれ… 校歌にも戦争の影

昭和十六年、米・英国の参戦、十八年国家総動員法の公布を見るなど、戦争の激化につれて、校歌改定が進められ、同年十一月七日第二高女の二番目の校歌の発表会が行われた。時代を表すように国文学者風巻景次郎氏の詞は戦時色を濃く反映している。作曲は、童謡「ゆうやけこやけ」の作者下総皖一氏（当時埼玉師範教授）で、さすがに美しく流れる旋律は人を引き付けるものがある。

浦和第二高女校歌（その二）
 風巻景次郎 作詞
 下総皖一 作曲

さきたまの にほふ丘べ
 よき庭につどふわれら
 常に若く 希望にあふれ
 道をふむ 皇国の乙女
 花のごと 咲きつぐや
 想ひやさし
 鏡なす みがくなり 強く正し
 なでしこの らうたくも
 まこと清ら
 ああ われらその上のみ親の道
 永遠に伝へむ
 さきたまの まもりかたき皇国の
 乙女ぞわれら

反歌
 鹿島たつ 神のさきたま
 遠世にも この浦和に
 よりたたしけむ よりたたしけむ

(出典：浦和西高校創立五十周年記念誌)

秩父商業学校行進曲

(昭和十七年一月八日制定)

作詩 富田 幸太郎
 作曲 権藤 円立

- 一 萬古揺がぬ 武甲山
 久遠の流れ 荒川や
 秀麗の郷 秩父なる
 常盤の森の 吾秩父
 清き望みに 集ひたる
 我等の意気は 天を衝く
- 二 秩商五百 男の子等は
 皆熱血の 権化なり
 磨き鍛へよ 皇国の
 力を頼み 選られたる
 この栄光と 歓喜に
 我等の血潮 躍るなり
- 三 ああ黎明の 鐘鳴りて
 商士の使命 告ぐる時
 友よいざ立て 手を取りて
 真の道を ひたすらに
 阻まむ者は 薙て行く
 我等の行く手 遠きかな
- 四 輝く御稜威仰きつつ
 八紘一字 肇国の
 はるけき理想 受け継ぎて
 ああ戦わん 勝戦
 名誉の歴史 飾るべき
 我等の使命 重きかな

昭和十九年一月九日発行の校内誌、「報国」より紹介

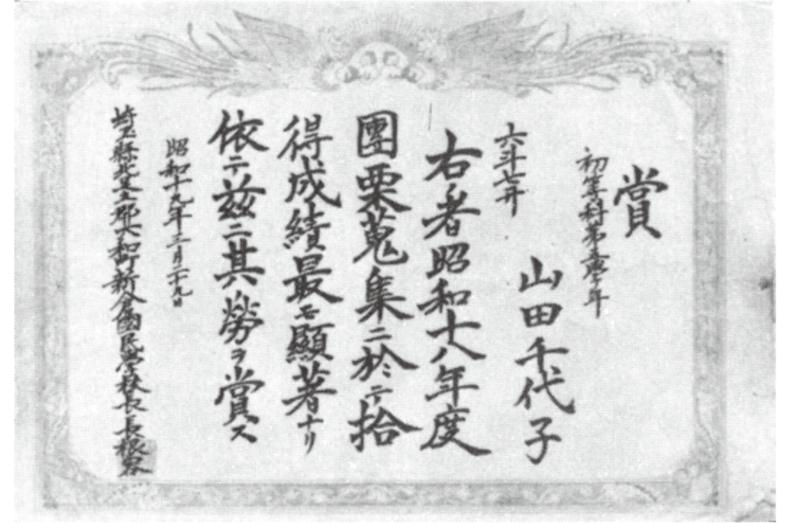
(出典：秩父高校百年誌)

平和のための学校教育の一環としての勤労奉仕

戦争展



農協前の畑で農作業 昭和18年の初等科4年生
食糧増産の勤労作業風景、戦時下を示す貴重な写真である。
(出典：宮寺小学校開校百周年記念誌)



当時の教育実践

戦争が日を追って激化するに従い、各種物資の欠乏は甚しく、とくに食糧不足は深刻なものとなり、国民学校においても高等科の児童は、食糧増産にかきたてられた。さらには、出征軍人家庭への勤労奉仕、田畑の除草、稲・麦類の刈り入れ等児童のできる作業に従事した。

特に、荒川の堤防の採草地では、供出の割り当てを果すため夏休みの学童の課題となった。

また、増産のための運動場のすみを農場として馬鈴薯や甘藷の栽培につとめた。さらに「ドングリ」を拾って集め、その量の多い児童を学校では表彰した。この「ドングリ」によって供出以外は金に替えて、教材用具（ボール）等の購入費用にあてた。

(出典：新倉小学校創立百年のあゆみ)



麦の手入れ (昭和15年)

(出典：秩父高校百年誌)



稲の手入れ (昭和15年)

平和のための埼玉 学校が軍需工場、兵舎に…

戦局の推移に従って校舎の一部を軍隊の宿舎に転用することになりました。国民教育の場である学校を、いかに戦時下とはいえ兵舎に転用することは、由々しい問題とは思いましたが、時局柄やむを得ず七教室だけ転用を認めることになったのです。このために一、二学年は二部授業のやむなきに至りました。またしても学力低下の問題があったわけです。

(出典：常盤小学校開校50周年記念『ときわ』)

部隊駐屯

いよいよ戦いが激しくなり、B29が毎日来るようになると、本校にも兵士が駐屯するようになった。最初の部隊は一ヶ小隊で隊長は少尉、隊員は年配の召集兵ばかりで任務は穴掘りであった。学校の北山に穴を掘ることで毎朝、学校の裏庭で点呼を受けてから出勤した。

(中略)

(昭和二十年) 四月には、陸軍気象部教育隊(浅野隊)が移駐して来て、校舎二階は内務班、音楽室は将校集会所、校庭は演習場となり、各地に防空壕が掘られ、多数の生徒も動員されるにいった。

(出典：小川高校五十年誌『教育の証言』)

一針に真心こめた軍需作業

(昭和17年)

本校では、軍需作業として、軍服の臂章を制作していた。生徒達は、起立して戦没勇士の英霊と戦線将士への感謝の黙禱を行った後、作業にとりかかった。「前線の兵隊さんの御苦労を忍び、偉大なる皇軍の戦果に限りない感謝をし」ながら「運ぶ一針に真心こめて」一つ一つ臂章を作りあげていったという。

学校が軍需工場

(昭和19年)

来る日も来る日も、軍服のえりを縫う人はえりだけを、袖を縫う人は袖だけを縫いました。軍服の穴かがりなどもいたしました。

(中略) 朝は八時に学校工場に集まり、「必死の信念、決死のご奉公」と書いた白鉢巻で仕事にかかるのでした。空襲がありますと、ミシンの頭部だけはえっちらえっちら防空壕へ運びました。



学校工場(昭和19年ごろ)



軍需品制作作業(昭和13年)

(出典：秩父高校百年誌)

学徒勤労働員

昭和 18 年 6 月 25 日に閣議決定として「学徒戦時体制確立要綱」なるものが出され、その要綱の二に「勤労働員ノ強化」がある。同年 7 月には「食糧増産応急対策二伴フ青少年学徒勤労働員ニ関スル件」が県内政部長から出ている。(中略)

さきの勤労働員体制確立要綱の方針は、「大東亜戦争ノ現段階ニ対処シ、教育錬成内容ノ一環トシテ学徒ノ戦時勤労働員体制ヲ確立シ、学徒ヲシテ有事即応ノ態勢タラシムルト共ニ、之ガ勤労働員ヲ強化シテ学徒尽忠ノ至誠ヲ傾ケ、其ノ総力ヲ戦力増強ニ結集セシメントス」とうたっている。

(出典：熊谷高校八十周年誌)



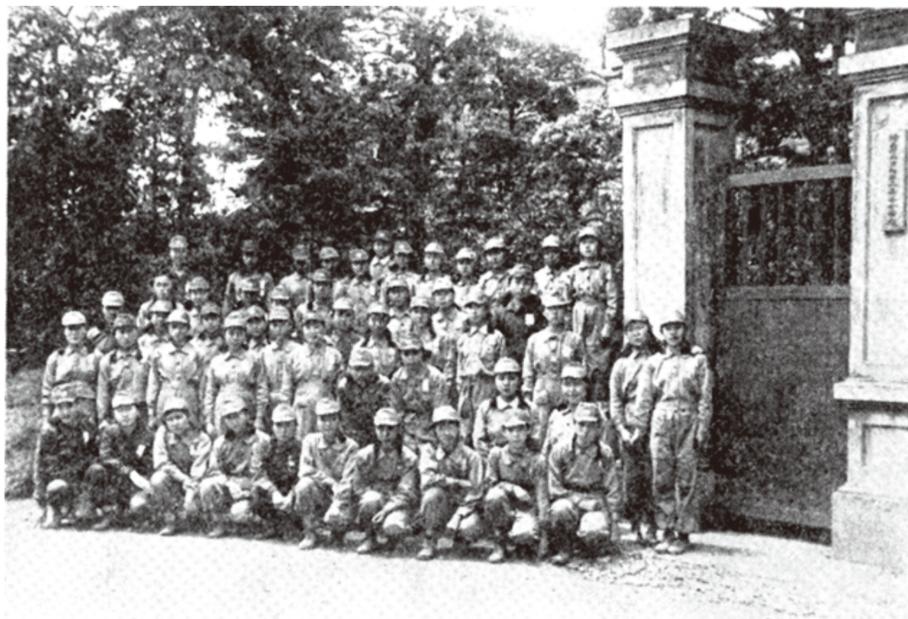
昭和電工における勤労働員
(出典：秩父農工 80 年誌)

学徒通年勤労働員に犠牲者出る

通年勤労働員として配属されたのは、三尻の陸軍飛行場と桶川の三井精機工場である。一年下では吹上富士電機に行ったものもある。三井では航空エンジン専用の特殊な治具工作機械を造っていた。増産増産のいらだちの中騒音、怒号、悪臭…それらの中にも得難い経験はあったが、学業を放棄していることを思うと悔恨もあった。

工場勤労働員中には空襲にも逢ったが、それにも増してショックだったことは、同学年の岩田君が機械に挟まれて一命を落とされたことである。彼は快活な男であった。胸幅が広く肺活量も声量も豊かで、校庭での分列行進にはラッパを吹いていた。大宮の病院へ学友が交代で看護や見舞いに行ったが、そのタフな彼が遂に学徒通年勤労働員の犠牲となった。

(出典：熊谷高校百周年誌)



昭和 19 年 6 月、新潟鉄工浦和工場への入所をひかえて、工場支給の作業服を着て校門前に集る(以後、登校することもなく、工場で飛行機部品や銃弾作りの毎日となる) (出典：浦和西高等学校創立 50 周年記念誌)



昭和電工勤労働員作業最後の日(昭和 19 年)
(出典：秩父高校百年誌)



勤労働員”神風”の鉢巻も凛々しく
(出典：熊谷女子高等学校創立 70 周年記念『鈴懸とともに』)

平和のた 学徒勤労働員の中核としての学校報国団

「学友会」が「報国団」に編成される

昭和十六年四月、文部省の訓令により、各中等学校に報国隊が結成されることになった。(中略)

これを受けて本校では、「学友会」を廃し「埼玉県立浦和第一高等女学校報国団」として再結成した。さらに、十七年十二月に報国隊が結成された。

(出典：浦和第一女子高等学校百年誌『ゆうかりとともに』)

昭和17年に「報国農場」という名目で、校庭の西北3000坪程の敷地を買収した。畑、田、桑畑、堀等のあった土地を整地し、排水設備を作って立派な農場にするまで一年はかかったと思う。それはすべて生徒の手でなされたものであった。いろいろな作物が収穫され、それらが給食の材料ともなった。

(出典：熊谷女子高等学校創立70周年記念『鈴懸とともに』)



報国農場づくり

(出典：熊谷女子高等学校創立70周年記念『鈴懸とともに』)



興亜学生勤労働報国隊秩父農林分隊の15名、大農機に乗って
(出典：秩父農工80年誌)

昭和十八年四月十三日午後六時過ぎ、下関港のふ頭に一隻の貨客船がひっそりと横付けされた。その船に向って、カーキ色の揃いの制服を着た少年の一団が、隊を組んで棧橋を歩いていた。まだ、十五、六歳のあどけなさが残っている。

やがて船は、三百人の少年たちを乗せ、静かに港を離れて行った。(中略)

乗船前に、そろいの制服を着せられ、腕に「興亜学生勤労働報国隊」と記した腕章を巻き、生れて初めて外国の土を踏もうとしているためか、皆武者ぶるいをしていた。

昭和十八年初頭、文部省は、全国の農業学校から渡満援農隊を募集した。約四か月半にわたって、満州(現中国北部)で穀物や野菜づくりを手伝う役目を分担したのである。

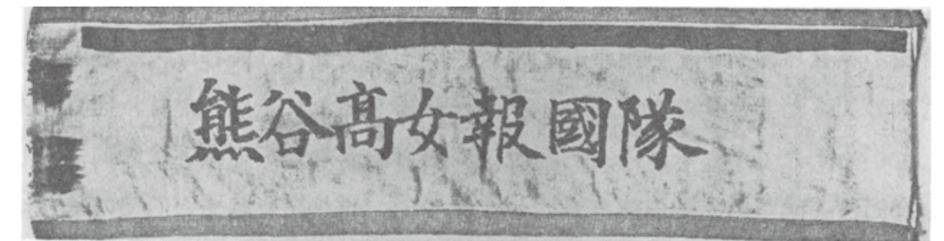
埼玉県内からは、秩父農林学校(現秩父農工高)と川越農蚕学校(現川越農高)が指定され、秩父農林から十五人、川越農蚕から十人が選ばれた。

(出典：秩父農工80年誌)



報告農場では、全校生徒が慣れぬ農作業に汗を流した。手にマメができ、脚にヒルが這い、辛いことが多かったが、若い少女たちの顔から笑いの消えた日はなかった

(出典：浦和西高等学校創立50周年記念誌)



熊高女報国隊の腕章

私達が女学校の学業を中止して軍需工場へ動員されたのは、昭和20年2月18日、2年生の3学期だった。それ迄も授業に代る勤労奉仕や軍需作業が随時あったし、上級生は既に工場で働いていたので、私達は動員を覚悟していたというより待っていたという方がふさわしかった。私達の学年の動員先は、理研、武蔵航空、熊谷航空の三カ所だった。「熊高女報国隊」の腕章が私達の腕に鮮かだった。

(出典：熊谷女子高等学校創立70周年記念『鈴懸とともに』)